

独居高齢者の個々の生活実態について 正会員 ○ 山下 剛*1
高齢者が自立できる社会形成に関する研究 その1 同 友清 貴和*2

1. 研究の目的と方法

近年の我が国における社会の高齢化は急速に進行しており、今後はやがて訪れるであろう高齢社会を展望しく高齢者のためのまちづくりを進めて行かねばならない。

このためには高齢者の生活実態についてそのメリット・デメリットを究明し、前者を最大限にいかし、後者は最小限に抑えかつこれをカバーしうる都市・社会・サービスなどを計画してゆく必要がある。

本研究では、高齢者の生活実態をコミュニティとの関連において把握するにあたり、対象を独居高齢者にしぼって分析する。

鹿児島県の65歳以上の者がいる世帯に占める高齢単身世帯の割合は29.9%で全国1位であり、鹿児島市もまた世帯総数に占める高齢単身世帯の割合が5.7%であり、全国平均4.9%をこえている。(平成2年・国勢調査)

そこで今回の報告は、鹿児島市在住の独居高齢者についてヒアリング調査を行い、その生活実態を把握・分析したもので、これは今後調査地域を拡大するにあたっての一指針を得るものでもある。

2. 調査の概要

2-1. 調査地域

調査対象地域としてその生活スタイルに相違が生じると思われる都心部とその周辺部、そして市周縁部の3地域を選定した。【表1】

2-2. 調査対象

調査対象者についてはまず鹿児島市役所から各地区の民生委員を紹介してもらい、民生委員から各対象者をランダムに紹介してもらった。

調査は対象者宅を訪問して行い、ヒアリングで得た回答を当方で記入した。

調査実施数は68名、そのうち回答を得られたのは52名であった。【表2】

2-3. 調査項目とその結果(単純集計)

調査項目とその主な結果を以下に記す。【表3】

【表1】 調査地域

	地区名	特徴
都心部	天文館地区	商店が建ち並ぶ商業地域
都心周辺部	平川地区	人口増加を続ける産業地域
	西伊敷地区	大型団地の建つ住宅地域
市周縁部	東桜島地区	過疎化の進む農・漁業地域

【表2】 調査対象

年齢区分	性別	総数	調査数
65~	男	488	0
	女	3202	9
70~	男	358	2
	女	2778	16
75~	男	389	2
	女	2191	8
80~	男	278	1
	女	1155	6
85歳以上	男	157	2
	女	485	6

調査対象者平均
75.6歳
鹿児島市平均
74.1歳

【表3】 調査項目およびその結果(単純集計)

調査項目	回答項目	人数	調査項目	回答項目	人数	
住居形式	持家持地	40	集会参加	不参加	10	
	民間借家	4		老人会のみ	18	
	公営住宅	4		老人会+他会	15	
	持家借地	4		他会のみ	9	
居住年数	0~9年	4	隣人関係	親しい	23	
	10~19年	12		まあまあ親しい	10	
	20~29年	9		あいさつ程度	17	
	30~39年	6		無し	2	
	40~49年	17		友人関係	0人	10
	50年以上	4			1~2人	27
独居年数	0~9年	19	3~4人		10	
	10~19年	16	5人以上	5		
	20~29年	7	就業状況	有職	7	
	30~39年	8		無職	45	
	40年以上	2	子供との対面周期	毎日	7	
子供との別居距離	徒歩5分以内	2		週数回	10	
	徒歩15分	8		月数回	11	
	車30分	9		年数回	9	
	車60分	5	数年に1回	2		
	車60分以上	8	独居理由	積極的独居	ひとりて生活できる	6
	県外	6		気兼ねなく何でもできる	7	
消極的独居	保守的独居	今の地域に馴染んでいる		3		
		子供の経済が苦しい・家が狭い		7		
		子供に苦勞をかけたくない	3			
持ち家(本家)だから	6					
墓があるから	4					

A study on the individual life circumstance of old person at living alone

A study on the forming society for old person can stand on his own feet part.1

3. 調査結果の分析と考察

独居高齢者の生活実態の特徴を明確に表し、かつ今後の問題点について示唆し得る項目をピックアップし、それらをクロスさせて分析した結果を以下に記し、それぞれの項目について考察する。

3-1. 住居形式について

地域区分ごとにその持家持地率を見ると都心部が最も低く、持家持地率は都心へ近付くほど低くなり、逆に郊外へ行くほど高くなっている。

次にそれぞれの平均居住年数を見ると、市周縁部が45.8年で最も長くなっているが、都心部と都心周辺部を比較すると、都心部の方が長くなっている。

これらのことから、都心部に住む独居高齢者には持家持地以外でありながらも、すでに長年にわたって居住している人も多いという実態が分かる。【図1】

3-2. 子供との関係について

都心部では<車行圏内>に100%子供が住んでいるが、より身近な<徒歩圏内>に住んでいる子供は少ない。また都心周辺部では逆に<徒歩圏内>に子供が住んでいる場合が多く、市周縁部では<徒歩圏内>に住む子供はいなかった。【図2】

また、子供との距離に面会周期をクロスさせると、距離が近いほど面会回数は多くなっている。

この結果、「毎日面会する」限界は徒歩15分程度の範囲であり、「週に数回面会する」限界は車で30分程度の範囲、「月に数回面会する」限界は県内在住である事、そして「年に数回面会する」のは県外からであると考えられる。【図3】

これらの事から「万が一の事態」になった時の状況を予測すると、都心およびその周辺部では子供との距離が近く、迅速な対応がとれるのに対し、周縁部での子供との連絡は困難である。

よって緊急時の体制が十分整っているかどうかが生市周縁部に住む独居高齢者にはより直接的に重要になるものと思われる。

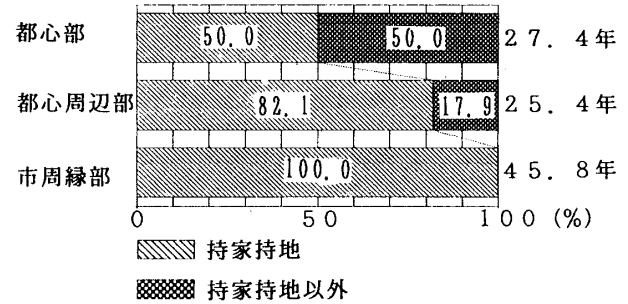
3-3. ライフスタイルについて

1日の生活を把握するために時刻別調査を行った結果、独居高齢者の生活では「起床」「朝食」「昼食」「夕食」「就寝」という生理的基本行動は実に規則正しく毎日繰り返されていることが分かる。

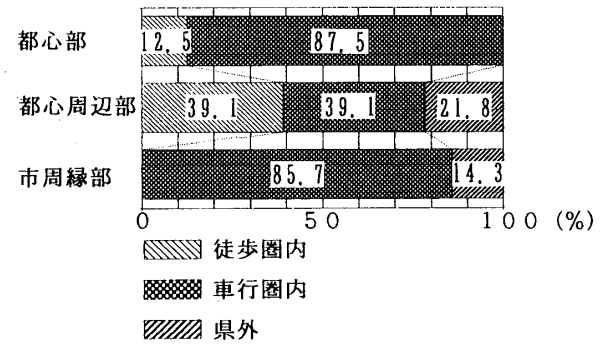
だが一方で、その間々での生活行動は常に決定的

ではなく、むしろ臨機応変である。

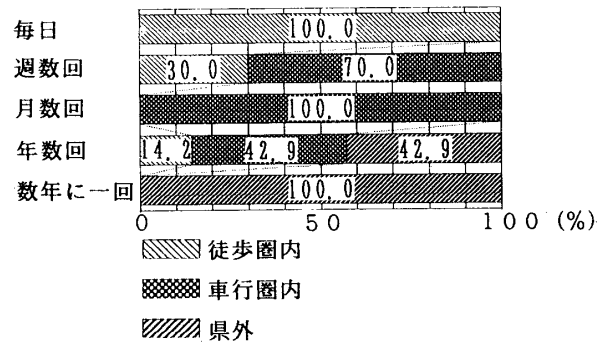
つまり、この<基本的事項は規則正しく繰り返し、その間の時間は日々自由に過ごす>という実態こそ、独居高齢者の典型的ライフスタイルなのではないだろうか。



【図1】 地域別に見た住居形式と平均居住年数



【図2】 地域別に見た子供との別居距離



【図3】 面会周期別に見た子供との別居距離

4. まとめ

以上の分析および考察により、鹿児島市に住む独居高齢者の個々の生活実態が把握できた。

この結果、現状には様々な問題点があると思われ、今後は調査地域を拡大し、より詳細に分析せねばならない。

*1 鹿児島大学大学院

*2 鹿児島大学助教授・工博